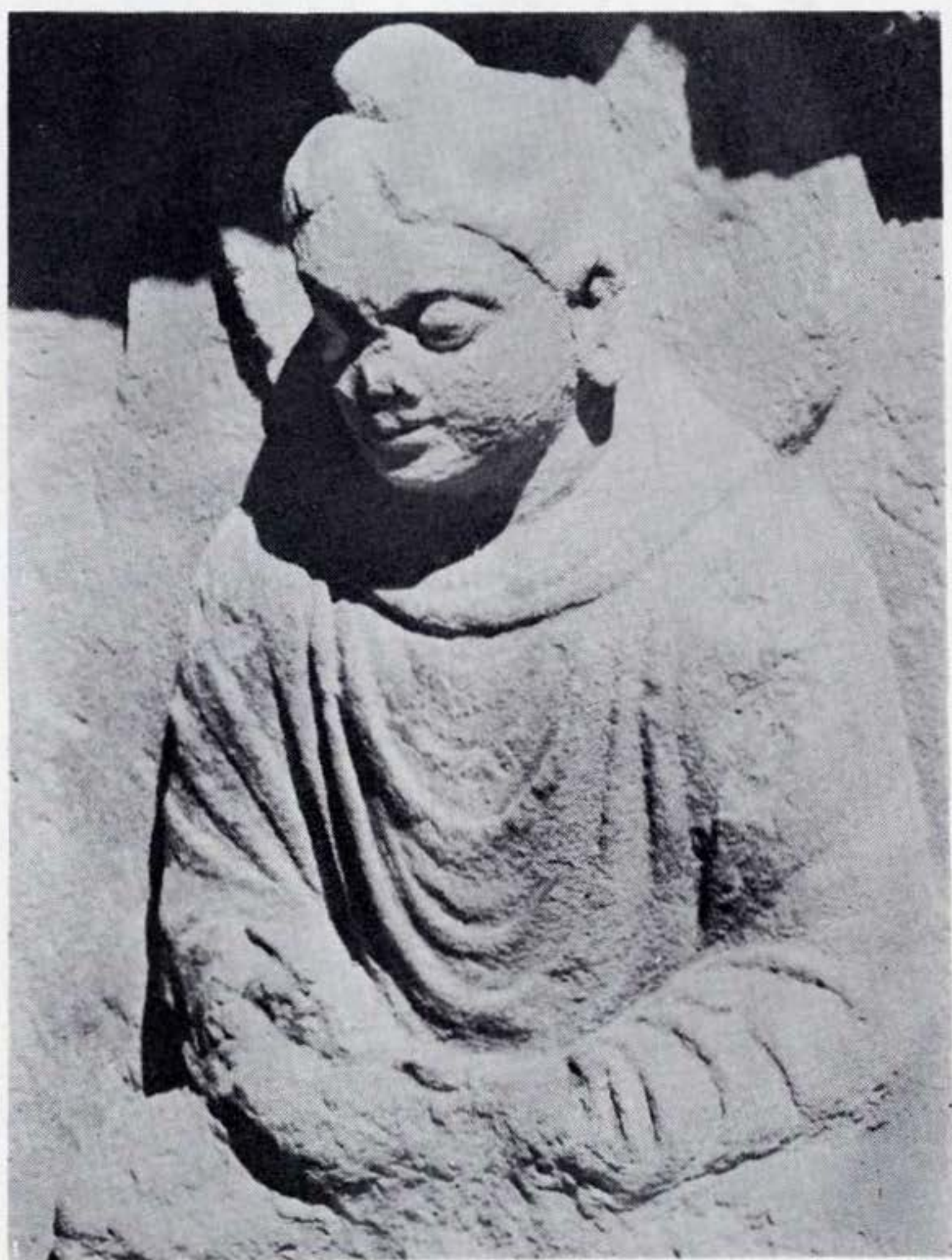


浄土

三月号



特集 現代に生きている仏教

法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 郵輸省(特別授受承認第三五二号)
昭和三十九年二月二十五日 印刷 昭和三十九年三月一日発行

第三十卷 第三号

ご法語で味う 念仏の真随

村瀬 秀雄 著

一枚起請文をめぐって

新書版一〇二頁・写真版二葉
価 一二〇円・(送 三〇円)

目次……一枚起請文とは……観念の念仏を排す……
聖道はあり得ない……信仰の目標……本願念仏を
申す……ひらに信ずる……すべてを包含する……
二尊の前に誓う……只一向に念仏すべし……御遺
訓にはげむ……二相承の合流……ご法語索引

信徒必携の奥義書
ご法語一〇〇句を収録

発行所

法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一の二
振替 東京 八二一八七番

文学博士 塚本善隆序
仏大講師 岸 覚勇著

定A 5 判
料価 三二 七八五 〇〇〇 円円頁

善導教学の研究

善導教学の由漸、特色、背景、観仏と念仏、著書
の前後、法然教学との比較より成る総合研究

附 録

「指方立相」についての浄土列祖の坐談会
恩師故望月信亨博士を憶う

三重県四日市市六呂見町観音寺中

発行所 記主 禅師 鑽仰会

振替 名古屋 四〇一 二番

よいこの パンフレット

はなまつり

価十五円
十円

B5判 四ページ 多色制

割引価

百部より 単価 十二円

三百部より 〃 十一円

(送料サービス)

東京都千代田区飯田町1の21

大 道 社

振替・東京8247 TEL<262> 5944



至誠心といふは、眞実心也。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙 小さな仏像

随 想	中村康隆・宅見春雄・大江守...	(2)
彼岸への旅	宮 林 昭 彦...	(4)
〔特集〕 現代に生きている仏教		
寺院と社会事業	川 瀬 法 円...	(6)
念仏はしあわせを生む	小 川 金 英...	(10)
寺院の葬式はこんな風にやれ	水 野 愍 道...	(14)
体験談 時の流れと共に	長 島 善 雄...	(16)
————— . ————— . ————— . —————		
近 世 文名録	川端信之僧正	高 橋 良 和... (20)
書評	水野愍道著「寺院生活」	(22)
茶の湯に 生きた人々	殊法大師	林 左 馬 衛... (24)
	ご法語をいただく	(27)
	表紙の解説	(23)
	教区だより	(15)
中国浄土教 物語	曇鸞大師と石壁玄中寺	牧 田 諦 亮... (28)

二つの鬼

中村 康隆

(大正大学教授)

節分もはやすぎた。節分の豆まきは、年毎ににぎわしくニュース面を飾っている。都市の社寺での行事は、ともすると大衆集めのために女優さんやお相撲さんなどの御登場を願っての興行化が目立っているが、古い田舎の寺などでは昔ながらに「鬼やらい」を実演したりするところがあり、これもまたこの頃の観光ブームにのって結構人気を集めている。私の県でも島田在の山村の寺で旧正月の修正会に三匹の鬼を出すところがある。仏教では鬼を心中の鬼すなわち心の迷いと解し、貪瞋痴の三煩惱を追い払って真生を現成しようというところから、赤青黒の親子鬼を仕組んでいるのだとされている。これなども明らかに、支那風の方相師などをあしらった平安朝の行事を脱皮した仏教者の新解釈であり、またわが国古来の習俗の中に見られる鬼とは全く異った鬼の姿といえよう。

古きものに

宅見 春雄

(仏教大学教授)

大阪夕陽丘の地に藤原家隆の塚が立っています。自坊の東側に接する所で、その塚に古い碑石と藤原家隆墓と誌した史蹟顕彰の碑があり昭和十九年三月建之と書かれています。今から丁度二十年以前の今月に記念して立てたものであります。ここで家隆卿の事蹟や塚の荒廃した姿を述べることもよりも古きものについて考えたいと思うのであります。塚は大阪社会事業短期大学と大日大立元理教団とに囲まれていることについてであります。夕陽丘は高台にあり、はるかに夕陽が西の海に沈むのを見ることが出来るから名づけられたのであり、少し南の一心寺に於て法然上人が日想観をせられた故事からも知られる所であります。ここにかつては茶畑がありましてその中に家隆塚が高くそびえていたことを記憶しているのであります。戦災後ここに二つの施設が生れまして、それが社会事業研究

きのう きょう

大江 守

(日本郵船勤務)

一月もすえ、散歩がてらに出た町で、シクラーメンの鉢をかった。葉かげについたかたい蕾が咲ききらないうちに、春咲きの花が豊かに出まわってくれるといいと、フト思う。朝の新聞を開いたら国立博物館に「東洋館——という見出しで、その新設が本決りとなつた記事が目に入った。これまで明治時代から収集されて来た東南アジア諸国の古美術の大半が博物館の倉庫の中に半ば置きざりとされたままだったとか。世界的なA A プームと先頃開催された「アフガニスタン展」や「古代インド美術展」に刺激されてか、ようやく日の目を見る事となつたわけである。すべて日本の流行は外国からの流入に端を発しているわけで、いささかお粗末だがこれを契機として東洋の美術が正しく理解され人口に膾炙される様になれば結構なことである。ガンダーラ如来坐像など、仏像の元祖といわれ

元来、節分の鬼は畏るべき鬼であり、人生の福を害うところの災厄をもたらす訪れ神と考えられたらしい。そこで焼いかがしやら柊やらで近づけぬ工夫をし、おまけに豆の威力で追い払おうというのである。このような鬼は節分に限ったわけではなく、正月のホトホト、二月事八日のネロハの鬼や一つ目小僧など、季節の変わり目毎の行事にはよくとび出してくる。それは、折にふれてともすれば人生の行路には災厄が起りがちであるという現実と、それをもたらすものは悪霊や怨霊の仕業だと考えた古い日本人の信仰に根ざしているのである。それを仏教は自分自身の心の迷いこそ根源なのだとして、災いをも転じて福となす教を説いたのであった。更に災をもたらす鬼が、実は災から人を守る鬼へと一転させられるようになる。初期の日本仏教が荒ぶる天部、四天王や不動明王などをうやまい、角大師や天狗などが厄除けの神札として永く庶民の信仰をつないで来たのも、その転化からといえよう。煩惱即菩提。この大乘仏教の考えがこの転化の根本にあるのだろう。

施設と新興宗教教団施設であります。極めて現実的な社会施設と全く信仰的な教団施設とでありまして、この二つのものにはさまれた塚そのものを見る時、古きものたどる道を見るが如き感をいただくのであります。

この姿を見るたびに、古きものの存在がいっしか歳月と風雨によってその姿を没し去る運命のあることを知るのであります。更にその自然の力の上に、新しい環境と古きものへの無関心とが加わることによって人々の記憶から消え去るものと思われるのであります。

家隆塚を通りすぎる時、福祉を説く大学が、又幸せを説く新興教団が、大阪の持つ史跡の破壊に力をつくしていることまでは云わないうが、少くとも無関心であることに対して悲しみと淋しさを感じざるをえないのであります。

たまたま身近かにこの姿を見て感ずるのであります。これと同じことが存在することを知るのでありまして、古きものに対して無関心であってはならないとしみじみ思うのであります。

るそれ等の仏像にお目にかかれる日がたのしみだ。

先日はオリンピック選手団の台所をあずかるコックさん達の結団式やオリンピック入場券の抽選会等もあつて、除々にオリンピックムードが浸透していつている様である。

何事もオリンピックまでと各会場・道路作りで東京の街はテンヤワンヤの状態だが、どうせやるなら立派なものにしたいと云う気運も出て来て切羽詰らないと何事にも気ののらない人の心がうかがわれておもしろい。

東海道新幹線もオリンピックまでと工事を進めている様で、東京駅やその周辺の風景も随分と変つて来ている。これが開通すれば東京・大阪間は三時間半、およそ今迄の「汽車の旅」と云う言葉の範疇に入らなくなつてしまふ様な気がする。これに負けじと、航空会社も近距離専門のジェット機を購入して、東京大阪間を三十数分で結ぶ計画を発表している。ますます、日本は狭くなつて行くことだろう。

彼岸への旅

宮林昭彦

いよいよ待望のオリンピックが、今秋東京で開催される。勿論、東洋でははじめてのことである。第一回が一八九六年にギリシャのアテネでおこなわれてから、漸くいま、東洋の空——東京の澄みきった秋空にオリンピックの聖火があかあかと燃えさかろうとしている。

西洋と東洋の道、この道が通じ合うには、いくたの苦難があった。流沙といわれた荒涼たるタクラマカンの砂漠地帯が、北に天山山脈、南に崑崙（こんろん）山脈、そして西に世界の屋根パミール高原にさえぎられて横たわっている。広漠たる砂漠の乾燥地帯は、動物や植物の生存さえさまたげて

いる。

しかし、人間のあくことなき欲望と追求はあらゆる困難を克服した。ギリシャやローマの人たちは、シナの絹の美しさを知ると、これを求めて、たくましい商魂が、ラクダをつらねてタクラマカンの砂漠を横断した。そして、天山山脈の南麓にそってすすむ北道と、崑崙山脈の北側にそった南道とを開拓した。そして、この道を通してギリシャ、ローマへ、中国の絹がはこばれるようになった。この絹の通り（シルクロード）は、絹ばかりではなく、西洋と東洋を結び、あらゆる文物を交流した。

いわば、東西文化の発達に、忘れることできない重要な路となつたのである。

○

現在では、シルクロードは、東西を結ぶかけはしでも唯一



の道でもなくなった。東西の文化をはじめ、あらゆる交流は、他方面よりおこなわれる。オリンピックをめざして集まる世界各国の人達も空と海から、短時日のうちにやって来る。東海道五十三次を幾日もかかって旅をしたのは遠い昔のおとぎ話であって、いまや夢の超特急が三時間半で快適に突走しようとしている。

むかし、夢の超特急どころか、乗物の一切ない時代に、自分の足で東海道を旅した頃は、余計に、旅は道づれ世は情けということを感じた。行きずりに知り合った人でも長い旅を続けていると、自ら人情が深くなる。途中、病いで苦しむ場合は看護もし助け合ったり、美しい自然の風物に心打たれた時は、その感興を語り合い、喜びも淋しさも共にわかち合つて長い／＼旅を続けたのである。肌にしみいるような風雨の冷さも、豊かな人情の温さに包まれて、旅の楽しみを味つた。

○

旅は人の心を豊かにする。人間の我利々的な気持ちは碎かれ、弱い心は勇気づけられる。とくに自分の足で命をかけて道をすすむ場合は尚更である。旅の道は求道に通ずる。

華嚴經の有名な善財童子の求道の旅もまた心強く打たれ

る。

かれは、一切の苦悩、煩悩をはなれて、無上のさとりをえようと思い、善知識をたずねて菩薩の道を求めることを心に誓った。かの少年は、文殊菩薩に激励されて、仏の無辺なることを信じた。かならず無上の悟りをえようと決心して、南に向つて求道の旅に出かけるのである。

善財少年がたずねた五十三人に及ぶ求道聞法した人達の中には、比丘や比丘尼、童子、童女、あるいは医師、長者、船師、また仙人、外道、バラモンなど、在家のいろいろの階級の人達や、仏教と反対の場の人にまでおしえを乞うのであった。

童子の限らない求道心のまえには、どんな階級の人でも、いかなる見解の人でも、みな等しく善知識であった。かぎらない道を求めようとする情熱が、童子の旅の心をかりたてたのである。

歴史はくり返されることなく、新しいページを開いていく。シルクロードに東西文化の交流当初の苦難と輝しく開かれたページは、今、ますます歴大になっていく。しかし、道は広く快適になり、ローマと東京は近くなっても、行き通う人の心が広く深まっていかなければ世界は一つになれない。彼岸への祈りをこめて人類は求道の旅に出かける必要がある

寺院と社会事業

——特に養老事業の体験を通して——

川瀬 法円

（社会福祉法人・東京養老院・
同付属信楽病院 理事長院長・
法円寺 住職）

一、老人クラブ助成審議会から私の見た各宗寺院

東京都に於ける老人福祉対策の主なるものは、「としよりの日及週間の行事」があり「敬老年金」があり「老人施設後援費」等があるが、全国的に有名であるのは、都の「老人クラブ助成費の支出」である。東京都では老人クラブは、地域の老人が老後の生活を健全で豊かなものにするために、自主的に組織するものであるとし、会員の年齢は概ね六十才以上とし、且会員が集会による活動の出来る会場を有すること、クラブは会員によって民主的、自治的に運営せられ、その活動費として定期的に会費を納入し、会員の向上、健康増進及レ

クリエーション並に地域社会との交流等の活動を総合的に実施するにあるとしている。

東京都では、其の一老人クラブに年額四万八千円也の助成をすることとし、その為に「老人クラブ助成審議会」を通じて目下全都に涉って、四百クラブの助成をしている。この助成発足の五年後の昭和三十八年八月一日に、新に施行せられたる「老人福祉法」によって、今度は厚生省に於て、全国的に老人クラブの助成をすることに規定せられるに到ったので、本年はその助成費の支出に依じて更に全国的に老人クラブが創設せられることとなるであろう。

私は東京都の老人クラブ助成審議会が六年前発足した当時

から審議会の委員として、今日に到っている者であるが、其の間各宗の寺院の住職の方々が、其の四百クラブの創立のうち陰にあって助成し、或はその創立者の一員となって努力し、或はクラブの会場として寺院の一室を提供している等の陰の努力者の多いのに感激をしている者である。

目下全国で約二万余のクラブが創設されているが、本年から全国的に老人クラブが創設されるであろうからその時に、全国の仏教寺院は、其使命を考えて一段とその創設とその会場提供のために、特別な御助力御尽力を願いたい。

詩経には、「世の中を平和に治めるためには、特に『養老和を尚^{うづか}う』』』ということを云われているが、各宗の寺院の老人クラブの創設及経営についての努力が、老人達を通じて家庭に対し、又一般民衆に対し、自然に社会平和及家庭平和のために、多大の影響を与えることであるであろう。

二、当養老院当院法円寺から見た寺院

当東京養老院（初代院長故松濤神達僧正、二代院長増上寺御法主故大島徹水大僧正台下、目下名誉院長として、増上寺御法主椎尾弁匡大僧正台下）と当院法円寺とは、昭和二十四年以降毎年行われている寒三十日間の「寒念仏」は、最も力をいれている年中行事の一つであるが、それは、老人が冬

の寒気に特に弱いので、それを克服して生きぬくためであり、又勤労長寿の人となるためであって、附属信楽病院の医局の後援を得て、十六年間実施して、大なる効果をあげているのであるが、此の間昭和三十二年以降八年間、静岡県のうち、網代、多賀、宇佐美、玖須美、新井、八幡野、伊東、熱海等の十五の各宗寺院から、又神奈川県藤沢市の竜口寺、法泉寺、常光寺、真源寺等の各宗寺院から、特別な精神的、物質的の御布施を受けて、寒三十日間の寒念仏の御応援を受けている。特に当院「寒念仏成満式」本年二月四日節分会には、午後二時、増上寺御法主椎尾弁匡台下には、大導師として法要を営まれ、老人と共に豆撒きを行われることである。その時に寒念仏の精勤者と当院内の善行者との表彰が行われる。増上寺御法主台下の御出席は、実に本年度連続第十六回目に当ります。台下には本年九十才の御高令に在す。誠に光栄至極である。それらの御力添の結果が、当院在住二百四十名中、病人を除く健康老人百有余名が、毎年大寒にもめげず、ひるまずに職員等と共に寒念仏に精勤しつつ院内の勤勞に奉仕している。私は右十九の各宗寺院並に増上寺御法主台下に対して、一同を代表して深甚なる感謝の意を表して居ります。

各宗寺院の方々が、全国の各地に於ても、其の地域に在る

社会事業に対し一層の御留意と特段の御努力御支援を御願ひ申上げたい。

三、養老事業と当院法円寺

当院は、六十才以上の老人等を收容すること二百四十有余名。「喜寿」の人あり、「米寿」の人あり、「白寿」の人も居る。平均年令は、男子七十四才、女子七十六才である。日本人の平均年令の男子六十六才を越えること八才であり、女子七十一才を越えること五才である。

院内では、第一に勤勞を尊重している。勤勞を神聖なりとし、老人等の心身に適當した勤勞に奉仕の念を加えた活動が、老人等の心身の健康を守るのに一番有効である。第二に一切のものを生かすようにし、節約し、無駄をせぬようにしている。第三に老人の消極的引込思案を排し、例えば「寒念仏」を行うように或程度の抵抗療法を加える必要がある。第四に安心立命の方法の修行をする。「不断念仏」をする。「おつとめ第一の生活」をする。第五に老人等に日々規則的な生活を堅持させる。第六に清潔と清掃につとめること。第七に火の用心を全員がすること等々。

かくて老人等の生活は、日々を老人相応の自發的勤勞奉仕の生活、順法自治の生活を行って、日々を明るく過すように

すべて法円寺流の指導をしている。斯くの如く、「念仏一心不乱」の生活と、阿弥陀經より、臨終の期には、阿弥陀仏が聖衆と共に迎えに「早來迎」(知恩院所藏国宝早來迎図を日展依嘱樋口富麻呂画伯が模写し、法円寺に所藏している)せられることを確信することと日常の生活の無事に対して、感謝の念仏をすることを教えて二十年となった。

四、養老六十年間当院經理は貧乏で一貫する

当院は、遠く明治三十六年九月十一日を創業の日と定めているが、その日から正に滿六十年四月余と相成るので、恐らくは全国の仏教社会事業の中では、最も古いものの一つであろう。

そこで昨昭和三十八年十一月十一日、十二日との二日間にして、創立六十周年祭を挙行し、第一日には記念法要を、増上寺御法主椎尾弁匡大僧正台下を大導師と仰ぎ、一山をあげて厳修した。第二日には記念式典を挙行し、浄土宗代表者殿、厚生大臣殿、神奈川県知事殿、藤沢市長殿、其の他全国各地から御祝辞を頂戴し、各方面から演芸の御寄附もあり盛大なる祭典が行われた。

顧みれば、当院は、昭和二十年四月十三日の戦災全焼後、東京都より神奈川縣藤沢市に疎開し、復興して本年で二十年

と相成った。

老人救護の業績に就ては、毎年東京都に報告して参ったものを集計した所、昭和三十八年十二月末日現在で、延人員は実に二百九十八万五百七人と相成っている。養老事業の業績としては、他の六百六十余の公私の施設に比較して、少しも劣らないことと思う。

この六十周年は、明治、大正、昭和の三代に渉る変遷の最も甚しい時期で、戦争も日露戦役、支那事变、第一次世界戦争、満州事变、第二次世界大戦即ち大東亜戦争を経験し、其の間には、米騒動にも、大正十二年九月一日の大地震火災にも、預金封鎖、インフレーション、厳しい統制経済にも逢った。特に大東亜戦争中には、乏しい食糧、衣料其の他日用品の配給にも喘いでいる時に、当院は、前述の通り戦災全焼の大災厄を蒙った。当時の当院の収容人員は、疎開後残った老人等百二十余人、硫黄島、八丈島の疎開民二百有余人、戦歿遺族の母子七十有余人等で、統計四百有余人であった。増上寺の御好意で、六ヶ月間幼稚園内に避難させて頂いて、昭和二十年十月に、藤沢市鵜沼の此の地に疎開したが、当時は日々の食糧、燃料等の物資不足には多大の苦勞を嘗めた。

右のように、六十年の養老事業を継続する間には、或時は火災に類焼したこともあり、或時は都下の大新聞を通じて、

誹謗されたこともあり、或は無実の投書や告発を受け、或は不真実の告訴を受け、養老事業遂行に妨害を被ったことも度々である。又前述の大戦災により全焼し無一物となつてから、修羅の巷や、餓鬼道、畜生道の世の中にもさ迷い歩いた。が然しその中であっても、当院は、愚の如く、魯の如く能く相続して、遂に満六十年四ヶ月余の今日と相成った。それには決して才能手腕があつたからではない、寧ろ無一物の姿で満六十年間を過している。従つて其間当院經理は貧乏で一貫し来っていることをよく御認識願いたい。只七百五十年前に入滅された法然上人を仏祖と仰ぎ、念仏信仰を基盤とした東京養老院の仏教社会事業精神のみが、豊富に、今日迄のバックボーンとして貫通している。それは広大な建造物があるうが、戦災により全焼して無一物になろうが、眼に見えず、耳に聞えず、手に触れずとも、その仏教社会事業精神は、魏々として、儼乎として実在し、相続され来ったのである。そのことは、六十周年の歴史がこれを証明している。

この確信信仰と、この超世の本願とを以てする仏教社会事業精神で、今日より一層健康にして文化的なる「敬老愛」に基ずく老人福祉事業を飽く迄追求する為に、六十周年を契機として、更に勇猛精進することを、法円寺の御本尊の御前に誓約致した次第である。

念仏はしあわせを生む

みんなの善意でそだった
よるひる銀行のたすけあい



小川 金 英

(花巻市 松庵寺住職)

この寺松庵寺は今から凡そ四百年以前に草創された寺であり、その頃まで真言宗の寮であったと伝えられているが、開山良縁上人がこの地域の住民を念仏によって化導したその熱意が現在の浄土宗松庵寺として生れた訳である。

当時の寺院はその地域に於ける教育の場であり、諸証明の事務所でもあり、庶民生活の相談所でもあった。この寺は特殊の開基檀徒があった訳でもなく、真に庶民の信仰と生活の中に共に生きて来た寺である。天災地変の折等は率先して救護に当った記録が残っているが、宝暦、天明、天保等の寺の歴史に残る大飢饉には当時の住持がお助粥の施行

や医薬施療など行乞(托鉢)によっておこなったと云う。又この飢饉疫癘死の諸群の精霊の為め年忌の都度大供養を営んだしるしの供養碑がいくつも建てられている。又寺内に地藏尊がまつてある。これはお返しすると称して菰に包んで北上川に遺棄したり、間引と称して、堕胎をしたりさせたりするこの地域の悪習を匡正し、生命の尊さと養育の大事を教えるよすがとして勧請したものの様で、この地藏まつりが夏冬の年二回行ぜられるが、全くこども会の様で、児童健全育成に大きな役割を果たして来た。即ち現今の児童憲章を地で行っていたと云えると思う。又境内に五百

万遍供養とか四十八夜念仏とか、当時の大衆教化の姿がこれ等の供養石に偲ばれる。

寺院の存在価値判断は檀信徒になくはならぬ教化の道場、憩の場であり得るかどうかによるのはもとよりだが、又一方地域住民の人達にささえられているかどうかは地域に精神上にも物質的にもサービスがなされているかどうかによって決定される。真に寺としての機能が發揮されてこそ生きている寺として親まれ、尊まれるのは当然である。この寺はそうした上に立って代々の住持が教化にいそしんで来た足どりが伺われる。

私がこの寺に晋山したのは約三十年前であるが、この道に入ってからこのかた、ささやか乍ら念仏のうちに教化の奉仕活動に喜びを感じつつ生きて来たが、奇なる因縁と云うか、児童教化と社会福祉の寺即ち庶民のしあわせを高めるために活動して来たこの寺に住持するめぐり合せを仏縁と思っている。かくの如く歴史をもつ寺をうけつぐ者としてその真価を発顕せしめる為に一体どうある可きか、と入山に当って考えた。そしてその第一に日曜教園を開いた。こ

れを手はじめに青年会、婦人会、子守学校などを創設しこの寺をして人々の心のより所となる様つとめた。

時偶々昭和二十年八月終戦間際に、戦災の厄をうけ本堂、庫裡をはじめ堂宇一切を焼失した。終戦と戦災と云う悪条件の中焼けただれた焼土に取あえず仮本堂を建立し、境内を開放して、児童遊園・児童文庫を開設し、また季節保育所をも開いた。当時のすさみ切った子供達の心に何よりも先ず温い灯をとぼさねばならないと考えたからである。然しすさみ切っているのは子供達ばかりではなかった。もっと困難な経済上の問題が貧しい東北の家庭にひそんでいた。あわただしい戦後の復興がもたらした外見の華やかさの蔭に残されたような東北花巻の町には、また復興のきざしさ見え出せなかった。

昭和二十六年十二月のことであった。東北の厳しい寒さと師走のさし迫ったある日の夕方、夏服装にふるえながら、ひもじさに泣く子を背負った母親がしょんぼりと寺の門をくぐって来た。事情を聞くと、明日はおろか今晚の食事さえ事欠くと云う状態であった。私は取あえず持ち合せ

のお金を与えて今後の方策を考えてやることにして一応帰宅させたが、今でもその女親の放心したような姿がにがい思い出として眼に浮んで来る。こうした訪問者はこの母親ばかりでなく、毎日の様にたずねて来るのであった。勿論民生児童委員と云う役職を持っていたからでもあるが、お寺と云う安易感和尚さんに頼めば、と云う信頼感もあつてか、いろいろな問題が持ち込まれたが、中でも経済の問題にからむ相談が多かった。家庭不和の原因もそんなところにもあつた。新学期や卒業期、さては修学旅行、学用品、PTAの会費等に苦しむ家庭、さらに不時の出費で生活を脅かされて^{おびや}いる家庭、一寸とした資金さえあれば行商も出来ると思われる人、等それぞれに適当な処置をつくし金品の施与をもして来たが、無限に財力が続く訳もなく、これ等の人々は質屋の門をくぐり尽して、質屋を利用し得ぬ全くせっぱつまった人達で、この様な状態を知っているだけに貸しても催促することも出来なかった。

これ等の人々の生活は「貧すりゃ鈍する」の喩えの如く全くどん底に落ち込んで行くばかりであつた。こんな人になどどんな説教をして見ても、精神指導しても期待される効果は得られなかった。こんな人達に気楽に貸してあげられる

金が欲しいと、友人（神主さん）と相談し二人で出し合つた一万円を基金にこの無利子、無担保のたすけ合いの金庫を開いた。

誰れも相手にしてくれないこれ等の人々に簡単に貸出される事に、感激して話しても説いても駄目だった人が更生の意欲をふるい立てる様になった。勿論少額な資金の事とて直ぐ資金固渇し貸出も出来ぬことにもなった。しょんぼりと帰って行く人をだまって見送るせつない思い、これは余りにも苛酷な現実である。然し只ことわるにも今までと違って只慰めばなしや批判的説教と異り、利用出来る場が開かれていると云う事だけでも安心感が持たれる様になった。この事を知った檀信徒や一般市民の方々は次々と資金を寄せて下さった。この金庫は単に簡易にお金を貸付ると云うことだけでなく、貸付けたと云う現実を通じて、これ等の人々の生活や生業の相談や指導はもとより、ややもすれば迷い易い雑多ないかさま宗教から正しい信仰へと導いてやる大きな役割もあつた。そのためには金を貸す業務から、種々な家庭の問題まで解決してやらねばならず、又もともと収入の少ない家庭に、度重なる借財、これをどうして返済させるか、悪循環をくりかえしていたのでは、何時

の間にか怠惰を養い働く意欲も失ってしまう、金を貸し与えることがかえって逆の結果を生むことになってはならない。その為には職を与えたり、収入増加の途を開く為に内職をすすめたり、幾多の悪条件を克服し乍ら、檀信徒をかけ廻り業者を開拓して、注文取りから、製品の集配、工賃の立替等、妻をはじめ寺族ぐるみの奉仕行をつづけた。

こんな苦勞も、どん底に落ち込んだ生活から立ち上りつつある人達の希望にもえた明るい顔や、本堂にひざまづいて合掌念仏している姿を目にする時一ぺんに吹飛んでしまった。喜びに生きる姿程美しいものはない。一つの家が立ち直るたびに私は妻と共に手を取り合って喜んだ。念仏はしあわせを生む。

こうしたささやかな努力が遂次実を結んで数多くの更生者が出た。一家心中寸前の人、殺人強盗などの犯罪歴を持つ網走出の六人家族、倒産した人も板金業を再開し、屋台車を引いていた人が店舗を持つ様になったり、お蔭で高校を卒業したと喜ぶ母子等、たった百円から一万円までの零細貸出の事だがはじめてからこのかた十三年間に六・三七

九人の方々の力となり、貸出総額五八二七・八九六円と云う取扱いをし、其他の物資八・八九一点に白米一三一升の数を示し、頼りとする人の無い人によるでもひるでも開いている銀行だと、誰れ云うとなくよるひる銀行と愛称され、松庵寺と云えば「よるひる銀行」「よるひる銀行」と云えば松庵寺と、利用者はもとより市民愛のシンボルとして親まれ、百円、二百円のお小遣や、一万円、二万、五万、十万円と云う全国からの大小さまざまな温い愛と、尊い善意の支援二一九名のお寄せ下さった資金額が六〇一・二六八円となりました。

東北の一隅にともしたほんのささやかな念仏の仏灯が全国的にひろがり、教化活動と社会福祉が大きなつながりを持つ様になった。又この寺にはよるひる銀行の外「両親クラブ」「心配ごと相談所」等活潑に働き、教化と福祉の一枚活動の松庵寺は、新らしい本堂に「仏教福祉センター」と表ぼうし、ささやか乍ら生きた寺院活動の新らしい一步をふみ出した。

寺院の葬式はこんな風にやれ

水野 愍 道

(浜松 法永寺住職)

古今東西を問わず何れの国にも葬式には一
種の風習が伴う。特に山村漁村の葬式には伝
統的に根強い習慣がその行事に喰い込んでい
る。ときにその風習が郷土色豊かなものとな
って「哀調の風趣」を末長く保存したいよう
なものもある。

従って、建築様式、舗装道路等刻々に変る
都市に行なわれる葬式の変遷と山間^へ避地の葬
式行事とはおのずから趣きを異にすることは
いうまでもない。

○

課題を与えられて「寺院生活五十年」の私
は、フト、昔から自分の葬むった数々の人の
戒名を過去帳その他のメモで拾ってみた。

往年、兼務した七ヶ寺と自坊を合せて推定

三千五百の死者に、所謂、宗脉相承の伝法を
贈って事たれりとしてきた私でこそある。

この間、私の「引導振り」は、師の坊ゆず
りの型にはまった一遍流のもので、工夫も新
鮮味もなかった。たまたま、大正五年浄土教
報社から発行された須賀隆賢さんの「引導下
炬集」や、最近も出来た同種のものを見て多
少のイロ気を添えてもみたが、結局、長年の
ログセ文句が身についてはなれない。

○

そこで筆者、この頃考えたことは、いずこ
も同じ一寸目だつ葬式につきものは弔辞の盛
沢山なことだ、結構なことだが会葬者はウン
ザりする。言うまでもなく弔辞は故人が生前
世の一角にたった業績を讃えるわけだが……

一家の主婦が死んだ――

夫婦生活数十年、内助の功、子女の教養、
家運の磐石、苦節幾歳月、縁の下の力もちを
した妙好人の貞節、婦徳、母性愛を追憶、且
つ、讃える弔辞をささげる人は頗る少ない。

○

せめて、常日頃つきあう菩提所の住職なり
とも「引導」に添えて一くさり弔辞に代えた
いものと、私は日頃、檀家の主婦、所謂、
「苦節数十年のお内儀さん」の生立、振舞、
勤勉、修養、逸話をメモして不意の用意に備
えている。

『ご住職が、死んだおふくろに与えてくれ
た弔詞が肝^{きん}に銘じて忘れきれない感激でし
た』

三年もたって、倅や娘からお礼をいわれた
ことが、事実、しばしばある。

人々から、忘れられぬ「引導」「弔辞」

「弔辞」これも、また

「葬式をこんな風にやる」一つかもしれぬ。

○

筈、^{ひもろ}築の葬式風景は、日本に残るひとつ
の情緒である。たとえそれが迷信であらう

が、野蛮であろうが、寺と墓を結ぶ「哀調の詩」である。

日本の隅々まで、宗教雅楽が行きわたって仏教行事にきつてもきれぬ葬式の莊嚴に異彩を放った時期まで、やたら模様替は、寧ろ危険である。

○

終りに一言つけ加えるならば、葬式は、とくに寺の一大浄財であり、更に寺と檀家との一大直結である。

導師となる住職は、無論、斎戒沐浴と緊張の一日であるが、役僧その他の誦誦寺院の人々も、すべての動作に「如法」の精神を忘れてはならぬ。

も一つ、檀徒の葬式に、寺世話人の代表と特に「寺庭婦人」が威儀を正して参列することは印象的である。

おしらせ

三月一日より当事務所の電話局番が変更しました。

(二六二) 五九四四番

教区

だより

東京教区

或る会合で、こんなことを云った作家がいた。「現代人の苦悩は精神から顔色にまで現われてきた。朝夕の交通ラッシュの車中では勿論のこと、歩く人々の顔色もすべて蒼白だ、いま血色がいいのは僧侶だけではないのか……」

この言葉は生理的に僧侶の血色の豊かさを指摘するのではなく、現代人の苦悩を救いぬ僧侶に対する痛烈な揶揄とみるべきだろう。それかあらぬか浄土宗にとっても、最も活発な動きが期待されている東京教区の現状を良心的に活動している、某師に質ねたら「一般的に発表出来るものと云えば、団参旅行ぐらいでしょう、あとは宗内の政治問題になりますから」との御返事、アッケラカンとせざるをえないじゃないか。

宗教紙に既報されているが、関東地区の教区長、宗会議員の集りである「全関東連盟」

が宗務庁の主腦者二人を一月十四日に「僧侶の非行云々」として監正委員会に訴えていたが、宗内刷新の目的の為には必要な事なのだろうが、本当の刷新とは教学、布教の力を發揮させる宗内の具現化なのである。人間関係の醜状は、もうアキ、アキシマシタ。

△宗祖七百五十年御忌をケイ機に教区主催の靈跡参拝旅行を毎年、実施してきたが、今年は第四回として六月上旬に曹洞宗大本山の永平寺を中心に北陸の旅を行うことになっている。既に定員三百人を突破して、三百五十人位になる模様。旅の道で教化を——。大いに結構なこと。

△大本山増上寺は東京の中心に位置して椎尾法主の偉大な教化力をもって、その命運が保たれている。オリンピックを控えて英文「増上寺のシオリ」も計画されている。二月二十三日には将来の伝道者となる少年達の得度式が行われた。又、加行道場も二月二十日より三月十二日迄ひらかれている。今春四月十四、五、六日の御忌法要の唱導師は東京の戸田泰善師、栃木の内田秀戒師、山形の渋谷師雄師となっている。(シラハタ)

時に流れるとともに

——福祉と社会奉仕——

長 島 善 雄

(金沢・心蓮社住職)

時の流れとともに世のありさまは全くとめどもなく変化していく。そして、時の流れの陰で泣く人々が如何に多いことか。声なき声は社会の隅々に聞かれる。その悲痛な声。私のかほそい声もそこに交錯している。現在の恐るべき政治・経済機構の重圧の中に、断層や亀裂の中に見い出される矛盾や不合理を私の肌を通して感じたままを語ってみたい。

○

今では旧聞になるが、過ぐる十月一

日、金沢市で、『一日厚生省』が開催された。一民生委員として、身につまされる問題をかかえ、そのなりゆきに一縷の望を托していた。というのは、私の担当地区に、老令年金の支給を当然受けるべくして受けていない不遇の一老婦がいた。昭和三十五年の受給権者調査の時、韓国に籍があったばかりに非該当の烙印をおされたのである。もともと日本人であつたのが、若くして先夫に死別し、二児をかかえての生活苦から、人のすすめで当時同胞であつた半島人と再婚したことが、今日の悲劇を招いたそもその原因である。

第二次世界大戦後、半島は韓国、北朝鮮人民共和国として新たに独立し、昨日の同胞は今日の異邦人として袖を分かつこととなった。そうした国際政局の大きな変動。しかも日韓両国の善隣友好はことあるごとに叫ばれながら一向に進展しそうにない。そんな大きな世界の動きとは、何の関係もないかのように、ささやかな一庶民の生活が昨日まで営まれてきた。ところが、福祉国家建設へのうたい文句にそって、その後、幾多の画期的な施策が、この国にも次々と打出されてきた。その一環として『年金法』が日の目をみるようになり、そうしてさしあたり無拠出の各種年金が支給されるようになったのも昨日のことである。こうしたあわただしい時をきざむ歯車の音にかき消されていたかのように、今まで政治と一

見無関係であり、無関心でありえたと思われるような人々の上に、政治はいろいろな形で影響を与えてきたのである。

この老婦人は爾来日本国の国籍取得のためいろいろ手を尽した。だが結果は徒勞に終わった。今更ながら日韓国交の不正常を恨んだのである。半島人に嫁して籍を彼の地に移しはしたものの、絶えて夫君の故郷を踏んだことではなかった。そして、その全生涯は現在をも含めて、すべてこの地で内地人とおつきあいをしてきたのである。離婚しようにも夫は既に亡く、帰国しようにも、この地にあつていずれの土地へ帰国しようとするのであろうか。国籍取得がその後意外に難航を極めたのは想像にかたくない。こうした中で、ようやく八方手を尽した甲斐あつて、遂に昨年の上旬、金沢地方裁判所の裁決をえて、待望の国籍取得に成功したのであつた。

やっとここまで漕ぎつけた喜び、近所の年寄りと同じ喜びを味わえる日も近いと、まるで鬼の首でも取ったような勢で駆込んできた。私もまた騎虎の勢で役所へ飛び込んだ。だが結果は余りにもみじめであつた。顔を上げてこの不びんな老人の顔をまともに正視出来ないのである。それから杓子定規な役所の回答がどうしても納得出来ないまま、市役所へ、県庁へ再三の日参となり、厚生省年金課への直接照会の挙に出たり、関係民間団体の会合の席上で訴え続けたりした。『受

給権取得時において国籍を異にし、その後国籍を取得するも受給権を取得することは出来ない』という年金法第三十六条第二項を盾に、どうしてもこの老人の経歴や、実状について一顧しようとしないう官僚のかたくなさと不誠意に何度いきどおったことか。法は法を盾にとるもののためにあるのではない、生かさるべきものをして生かすためにあるものでなければならぬのだ、と一途にその不合理や矛盾、ひいては政治の貧困に対決するつもりでひとり気おい立っていた。世の良識によって、必らず拡大解釈の可能であることを実証出来るとの望みを捨てなかつた。

ところが、厚生省から出ている『年金』八月号に、同ケースの問題に対する、厚生省の最終的とも思われる回答が発表された。拡大解釈の余地どころか、今後如何なる事態や、解釈がなされようとも、このことに関する限り絶対に支給されることはない、というのだ。そのうち拠出制年金の実動期に入れば、いやおうなしに弱者の嘆きは時の流れの中に埋没してしまふことだろう。今や、このささやかな願いは無残にも地べたにたたきのめされたのだ。

そうこうしているうちに、昨十月一日、金沢で一日厚生省が開催された。勿論私のような末輩の同席出来よう筈はなかつた。そこで、県民生委員協議会連合会長荒崎良道師に訴

え、特に同席上で、厚生大臣に直訴していただくよう懇願した。

まもなく、市役所から校下善隣館へ、そして私のところへと快報が飛んできた。話がどこでどう急転直下の解決をみたのか私は知らない。今さらそんなことを知りたいとも思わない。昭和三十五年にさかのぼっての支給である。病弱で、市の失対の日雇労働者である息子さんと、ほそぼそながら煙を上げていたこのつつましやかな、善良な老婦人はいつまでもいつまでも泣いていた。

○

石川県の私学に労働組合が生れて三年になる。かくいう私はその執行委員の一員でもある。一方では、町の世話役として住民から慈父のように慕われながら、職場へ帰ると、忽ちたなごころを返えしたように、ゼニよこせのダニかなにかのように豹変し、執拗に経営者に向って攻撃をしかけていく。年甲斐もなく、若い人達と一緒にスクラムを組んでいる。なんとという因果な宿命だろうと苦笑することもある。

アメリカ並にはとてもだが、せめて西独なみの賃金を、と熱望しているのは全労働者の切なる願いでしょう。企業の幅や生産力の増大、潜在的な技術や人的資源などからみて、早晩、いわゆる先進諸国に追いつき、追い越すことだろうと思

う。だが現状においてはまだまだ資本蓄積の根は浅い。その上、国際貿易において自由化競争の泥をかぶりつつある。こうしたこの国の経済の中で、さらにみじめなものは中小企業とそれに連なる無数の労働者である。そうして、こうした弱小企業の中では経営者というも、労働者というも一把一からげで、「兄弟かきに相せめく」愚はなんとしてもナンセンスである。日本経済の縮図のようなこの企業間で、甲論乙駁、いかに日を重ねても根本的な、基本的な解決を求めることは無駄であろう。こんなチャチな論理と百も承知で対決を余儀なくされている。戦うべく宿命づけられている両者の、平行線を辿っていく姿はまことに業なことだと思う。何人も争いを好むものはいないことと思う。だが、戦かわずして自己を守りえない労働者の姿は、何物にもましてみじめだと思う。甘いも、酸いもわかりながらひしめき、もがき、うごめく人達の叫びは悲痛である。働きながらも、絶えずつきまとう不安・動揺。その中でしか生活し、考えることしか出来ない労働者の哀歎こそ腸わたにしみてくるものがある。

みんな、苦しいのだ。苦しんでいるのだ。生活すること、戦っていることも。そのことは既に観念でも、抽象の世界でもない。生々しい生きることへの叫びである。まして論理の遊戯でもない。独占金融資本に毒されている日本の政治

経済は、このか弱き労働者の上にあくなきしわ寄せをしているのである。『願共諸衆生』の悲願。私もまたうめかざるをえない。

この暮の斗争も日とともに激化していった。団交は数次にわたる。深更に及ぶことも一再ではなかった。「言った。」「言わぬ。」「聞いた。」「聞かない。」という怒声が乱れ飛ぶ。いつか理性を失った人々の渦の中にまき込まれてしまう。そこには目をおおいたような露骨な感情の激突があるだけである。互に他を傷つけ合う不信感。私は堪えられなかった。

私は沈黙した。不測の波紋、破綻を思い、わずかに妥結の日まで耐え続けた。そして、その任を辞した。若い書記長が泣いて訴えた。私も泣いた。新年とともに賃金斗争も控えている。解決しなければならぬキメ細かな幾多の問題も山積している。学校自体も旧木造校舎の改築という大問題をかかえている。校舎には既に人影もない。暮れやすい師走の夕闇は、もう校舎を黒々とおし包んでいる。もうさっきから何時間語り続けてきたことだろう。二時間・三時間と時間は経過している。そしてまだ静かに話は続いている。なかまの一人一人の実態や動向について刻明に掘り下げられていく。みんな重苦しい不安の中に何かを求めているのである。共通の場を。持ってか、求めてか。理屈も、言葉もない。純化された

感情。汚れない魂。沈黙の一時が音をたてて流れていく。静かな感動の高鳴り。どちらからともなく両の目に涙が宿っていた。

今まで自分なりにと堅持してきた信念や理論。意地や感情が音たててくずれていく。虚脱したようなうつろな胸の中へ、声なき人々の声がわんわんと響いてくる。働くものだけが聞くことの出来る切迫した響でもある。

大平ムードの中で迎えた新年。一杯の酒を掬んで陶然と酔を発している今、すぐ昨日起ったことのようなことも、遠い潮ざいのようにこもごも私の胸中を去来する。

お彼岸の施本

仏教の生活

特集／彼岸から花まつりへ

願われて育つ／子供にすすめてできる本／シルク・ロードとは／俳句／良寛のはなし／名僧寸話／花まつり・グラビア／経典のこゝと／実話・慈愛とともに／信の風光・花など家庭を明るく、信仰に芽ばえる施本をおすすめします。

A5／十六頁／一部二十円／五十部以上
一部十二円 丁実費／見本乞切手三十円

東京都文京区湯島三組町13

仏教書肆 中山書房

電話 (831) 8 4 9 4 番

川端信之僧正

高橋良和

(中外日報社取締役)

日華事変がはじまつて間もない頃ふと筑後の善導寺を訪ねたのである。その頃はまだ大本山に昇格していない前であるから善導寺貫主という頃の川端信之僧正にお目にかかったのである。

玄関右の大きな楠の木の間をはっている道をまたいで玄関にあがると、当時ここの寺務所はあまり人もいなかったようで、さっそく奥の貫主の部屋に通してもらったのである。かなり広い部屋であったが、割合に日あたりのよい部屋であったことを記憶しているがそ

れまで一二度お会いしていたものの、膝をまじえて二人で語るのはこのときがはじめてであったので、川端貫主はまるで吾が子にでも教えるようにやさしく善導寺の故事や寺伝を話してくださったことをおぼえているのである。

丁度その話の、さなかに廊下の向う側の座敷の縁側を数人の参詣者の姿をみたのである。

参詣の人にはとつぜんこの貫主の居間の方を向って縁側に座ったかと思うと、合掌しているのである。もちろんおねんぶつを称えていることはすぐわかるのであるが、このとき貫主は膝を正して、それらの人々にこたえるように十念をさずけられたのであるが、それが終ると、貫主は、

高橋さん、この寺はな、これでしんどいのや。わしのような凡夫がこんな大きな寺に入山して、徳もないのにああして十念を授けるのやから、實際恥しいことや。それだけ毎日少しは反省して、なんとか徳を身につけたいと一心にはげんでいるのや。

とわたしに語るのである。なるほどなあ、大きい寺に入るとこんななやみもつきまとうのだなと思うと、寺をもたない自分の軽さをうれしく思ったのであるが、この老貫主の述懐ほど、わたしの数々お会いしたお偉いお上人のなかで、人間の真実があふれているのを感じたことがない。

朝の三時から起きて三時間近い毎日のおつとめを一人で行う、この老貫主は、その一日一日が修養の一日であると語っておられ、その心意気を一生忘れたくないと思った。

この老貫主はその後推されて知恩院執事長、そして間もなく黒谷本山の法主として入山されるのであるが、その頃はもつと／＼円熟してまことに人なつこい、円満な御法主という批評であつたが、丁度、黒谷本山の望月法主が知恩院に晋山されたあとのことであつたのである。

たまたま黒谷本山の後任としてこの川端貫主、当時の知恩院執事長が噂にのぼつたときである。

当然この老貫主がその第一人者であるとは思つたのであるが何分にも筑後善導寺の貫主であり、その地位からいって、別に同寺を捨て、黒谷本山入山されるほど不自由でもないし、まして物資不足のときに、都会の本山に入つて不自由な目に遇われることもあるまいと思つたので、あるとき知恩院の執事長の部屋で、

法主さん、何も善導寺本山の法主さんなら御気楽でしょうそれに知恩院の執事長を兼ねておられるなら結構なものじゃないですか。黒谷本山も結構ですけど、法主としてお住居になるのには不自由だと思いますが。

となにかなしに話したのである。するとこの川端法主は、そ

う思うやろ、それはな世間のことや。わしは名誉心が強いとかなんとかあんたは思うかもしれんが、坊さんになつたらやっぱり坊さん街道で出世することが目的とちがうかな。それなら黒谷本山に入つて法主になるのが出世やと思うがな。兵隊なら大将や元帥が目的やろ。それと同じことやがな。

というのである。

外の人がこれをいったらきつと名誉欲のつよい坊さんやなと鼻につくと思うのであるが、それが一寸もおかしくないところに川端法主の人徳があると思つたのである。

なるほど、お坊さんならそうや、わたしはうなずくと、それなら行きなさい、黒谷本山の法主なら五世ですがな

わたしは無条件で川端法主にすすめたのである。

もちろん川端法主はそのまま黒谷本山に入山して一年もたたないうちに他界したのであるが、わたしはいつもこの法主のこのことばを思い出すのである。

お坊さんならお坊さんの道で出世することがその使命である。お坊さんが工場を経営したり、会社の社長になつて出世しても、それは世間のこと、お坊さんの本来の姿ではないのである。そう思うと川端法主のこのお坊さんとしての悟りは今もなお耳朶に残っていて美しく思うのである。

たくましい生活の智恵

水野愍道著

「寺院生活」

水野愍道氏と言えば、若い人々には余りなじみがないが、戦前の人で浄土人であれば、誰しもその人を知っていることであろう。特に童話の世界での氏の活躍は、余りにも有名である。しかし水野氏の私生活や、その人生行路について、詳しく知っている人はそれ程あるまい。

「寺院生活」という三五〇頁のこの本は、そうした水野氏の生涯が、氏自身により赤裸々に浮きぼりされている、めずらしい、そして面白い本である。そこには、水野氏の何の隠しもない人間のありのままの姿が画かれていると共に、又戦前より戦後にわたる寺院生活の実態が、社会の動きと共に克明にかかれている。時には見せたくも無い恥部までが、さらけ出されているため、これ程までに露出

しなくてもよかりそうなものだと思ふ人もあるだろう。しかし、そこに今日までの寺院生活の実態があるとすれば、こうした人によって、いろいろな問題としてなげかけて頂くのも、又意味のある事であろう。所詮これは、水野氏の様な人にして、始めてできたことで、その点好き人を得たと言うべきであろう。しかし、ここに示されている「寺院生活」なるものは、決して寺院生活のすべてではなく、よい点も、悪い点も、氏個人を中心としたものである。特に、この自伝の中に出てくる水野氏は、稍、宗教人としても特異である。東海中学時代の無鉄砲な青年時代の如きは、氏独自のものであり、この内容は、一人の特異な宗教人の寺院生活の記録と言える。

しかしながらこの特異な記録の中にも、現在でも持っている寺院の問題が浮きぼりにされており、又氏自身の見解が披歴されている。例えば、寺院と一口に言っても、多種多様である。寺院生活のみでは立ちゆかぬ寺は、今日でも数多い。こうした寺院を如何に経営し、尚且つ信仰面においての活動をいか

に積極的にやって行くかという如き問題は、今尚、今日の問題である。氏の父の如く、そうした寺を捨てて、朝鮮開教に向ったのも一つの在り方なら、氏の様に、童話の世界の中で、これを見出しして行くのも一つの在り方であろう。童話が好きで入った道には違いないが、そこには又寺院生活を如何にし、教化をいかにするかという考えが、氏自身の心の底にもあったに違いない。

一例を示してみよう。

「私はつくづく寺院というものの庶民に魅力の乏しい陳腐な存在に悲哀を感じた」

「いまの世の寺々が、葬式法事にのみに暮している。寺に住む人々は檀家の雲にのつて安住しているにしかすぎない」

「拝観料で金もうけの出来る寺は、京都や奈良を除いて日本にザラにはない。いまにして寺に暮らす人々がめざめなければ寺はほろびる」

こうした反省と批判が、時に首を出す。前半の記録は、やや型破りの寺院生活の数々であるが、後半は氏自身のこうした反省にもとづく活動が、具体的な事例として、繰りひろ

表紙の解説

小さな仏像

ジュリアンの僧院にて
＜タ キ シ ラ＞

ガンジス平原の北西の境、ガンダーラ地方は、インドが海路によってヨーロッパと結ばれる以前、西方諸国とこの国との唯一の窓口でした。雑多な民族、宗教そして文化が、この地方を通じてインド半島に入ってきて来ました。ガンジス河中流に興った仏教は、この地

方にも広まり、そこに入ってきたギリシャ風の芸術と交叉して、強力な統一国家クシヤン朝を中心に、所謂ガンダーラ風の仏教芸術を生み出しました。仏教崇拜の習慣を持たなかった仏教芸術に、仏像の製作をうながしたのは、このギリシャ芸術であったと云われています。現在、あちこちの岩山のかげに、寺院、大塔がなかばくずれた姿をとどめている外、この地方特有のタテに割れ易い黒青色の輝岩で作られた彫刻、ストゥッコウと云う粘土で作られた仏像などが豊富に残っており、仏像は、

全体的に彩色がどこかされていたらしく、ホリの深い衣のヒダなどに淡い色を残しているものも見られます。ここにあげたものは、僧房の傍にある大塔（ストゥーバ）の長方形の基部に近い外壁にかざられたストゥッコウ製の小さな仏像の一群の中、比較的よく保存されているものです。高さは六十センチ位のものでした。一寸うつむきかげんに、ストゥーバ全体を背負っている様な感じで、望遠レンズを用いて、腹ばいになって写したことを記憶しています。

（佐藤良紙）

げられてくる。氏をめぐる人々の中で、八木祐鳳という氏の親友の記録は、本書前半の一つの山を為している。

梵鐘を突くのが、祐鳳の日課だった。冬、六時、夏五時。

鐘楼に立つ白衣の青年、八木祐鳳

朝の冷気が身に泌みて、カリエスの背筋のあたりが、キリッ、キリッと痛む。

ベタベタと、地面に坐り込んで立つ。

立ってはまた坐って、十八の鐘を突いた。

病身の彼が、苦しい仏道修行をする姿がよく示されている。この人も、やがて童話の中に生き甲斐を見出し、宗教者としての生活に入った。しかし病に勝てず早く世を去った八木氏に対して、氏は烈々の友情を籠めて氏の生を綴っている。「仏教百事問答」も又二人の結晶のたまものであったという。寺の子が、寺を守らなくなったばかりでない。在俗の人が寺に来て、宗教人として、自己の生命を捧げようという人々も少なくなっ

た。戦後の寺院経済が小僧を置く事が出来なくなつたのも原因には違いないが、それ以上に宗教的情熱が今の仏教界にはうすくなつた。その一面、現世利益的な新興宗教が大きな顔をして大通りを歩くようになってきた。こうした事を反省させるのにもこの本は大きな役割を果たしている。露出症ぎみなこの本もこうした角度からみるときは、現代の課題にとりくんだ好著としておすすめしたい。

（発行所、法永寺 浜松市笠井丁六〇三 七〇〇円）

三井家の女丈夫

殊法大姉

林 左馬衛

(宮内庁 図書寮)

三井高俊の妻、後の殊法大姉という人は、茶の湯を愛好した人ではなかったから、茶の湯の話をする場合のひきあいに出すのは、少々、的はずれているかも知れない。また、そのえらさも、単に茶の湯という狭い世界の中でだけ通用するえらさだったとは思われなから、この人を一種の茶人として考える逆説的な考え方は、はなはだしく妥当性を欠いている、と思われても、いたしかたないかもしれない。

実際、女であることの中に、もっとも平凡

に埋没していったかにみえる彼女の生涯は、時の茶道史と、何の関係も、何の交渉も持ちえなかったし、また、ずっと後世の三井家の茶風について語る場合にも、彼女に登場してもらわなければならない事情が少しでもあるとは、考えられないのである。

しかしながら日本人の茶の湯にあって、歴史的思想としても、現実的徳目としても、もっとも大切なものと考えられてきた「わび」という精神について考えるとき、ちょうど彼女の生涯において考えられるような、無数の人物に登場してもらわなければ、なんとも解決してみようのない、ことがらが、やはり、たくさんあるようにおもわれるのである。

殊法大姉は、三井家初代三井高利の母であった。夫の高俊が、寛永十年になくなってから、五十三年生きて、八十七歳で世を去ったが、高俊との結婚生活は、二十二年間である。その間、四男四女を挙げたが、終世、伊勢の松坂で暮した。

夫高俊という人は、天正年間に生れた武家で、連俳や遊芸にその日その日を送った、文人風の人であった、という。一体、三井家

は、近江の豪族であって、その名の知れわたった、近畿地方の名家であったが、高俊の生れたころは、没落して、伊勢に流浪してきていた。もともと、近江佐々木氏の一門として時めいた存在であったから、六角氏も京極氏も滅びてしまうと立場がなくなって、ほんの一時のつもりで伊勢の被官の世話になったのが、のびのびになってしまったのであろう。

高俊の父、高安が当時漸々勢を得てきた美濃の奥田氏と縁組しているのは、高安の代にはまだまだ一級の武将としてみとめられていたことを示すのであって、伊勢に流浪したといっても、大した尊敬と信頼をもってむかえられていたことが察せられるのである。

したがって高俊は、名門の子であるに違いないが、殿様以外のものにはなれない殿様でない人として育っていて、もう一度殿様になる風が吹いてこないかぎり、地道にこつこつ努力して成功することなど期待できない人物として完成されきっていたのであって、どうも今日の意識からすると、商人の先祖にはなれそうにない人物であったわけである。

姑の奥田氏は、これもしかるべき武家の人

であつたから、その方面でのカンはずえていても、やはり一等級下つた階級の生活に降りてゆくことは苦手だったので、この一家は、生活を土台からささえてくれる人物が他所からあらわれてこない限り、もうどうにもならない状態のまま、高い教養とプライドで塗り固められてゆくその日その日を過していたものと思われる。

殊法は、十三歳で嫁に入つた。三井家の名聲と、その名声を支えたに違いないすぐれた素質に着目した殊法の父、伊勢丹羽の永井左兵衛が、彼女の夫をみたてたのであつた。

今日、一般に考えられている以上に、当時の武家というものは、商業的な才能を重要な素養としていたが、当然のことながら、この才能は、下層の階級になるほどするどくときすまされていたのであつて、この点をめぐつての上下両層の交替が、近世史を導き出してくる大きな要因となつていたものであるが、この点、永井家は、三井よりも奥田よりも、一つだけ低い階層に属していた。結婚は、たんに、資本主義的にみて同格であるという条件だけではなく、お互の家にはないものを交換

しあう目的で行われたものと考えられる。

永井左兵衛は、もちろん、この結婚を心から喜んでいたし、土地の人たちも、これを、似合いの縁組みと考えていたが、殊法自身は、十三歳という若い年齢で嫁に来たことでもあり、しばらくの間は、まったく、姑奥田氏の教化にしたがつて、暮していたわけである。

後年、殊法は三井家のあり方を、完全に町人のあり方にきりかえる大事業を果たしたが、そうなるまでに舅・姑・夫のよいところ、つまり自分の中で生かしてゆけるものを、注意ぶかくみつづけ、一切の人たちに不満のないかたちで、新しい方針を打ち出して行った。これが、ことにすぐれたところであつたので、もし相手を否定してやりはじめたら、抵抗が大きくなるばかりで、なんの発展も期待できなかったであろうと思われるのである。

三井家では、彼女の行く前から、おそらくこれは、三井家が伊勢に来て寄留するようになつた家の業であつたと思われる、酒・味噌の商いを行っていたが、その他に、質屋を兼ねていて、これを、生活の基礎にすえる体制

を強化しつつあつた。都合のよいことに、彼女の生家も、こういう生き方をしていた家であつたし、折しも、こういう生活法をやりこなしてゆける家だけが大きく発展してゆける氣運にあつた時代でもあつたから、この中にあつて、彼女の果してゆくべき役割は、最初からきまつていた、と考えてよい。

ただ、なにぶんにも、彼女の嫁ぎ先は、この商業を發展させてゆくためには、あまりにハイブラウであつて、それが、商業そのもののあり方を、ほんの若干ではあるが、甘くしてしまふきらいがあつた。

殊法は、この一見マイナスに見える点に着目して、これを大きく生かすやり方に成功し、ついに大三井の基をきずくのであるが、それがよし父永井左兵衛の当初からの期待であつたとしても、やはり、人と、ながい努力なくしては果しえなかつたであろうことが、感ぜられてならないのである。

彼女のことを、時の人々は、女には珍らしい商才にたけた人と、ほめたたえていた。そういう眼でしか評価をうけえないのが、彼女自身の立場であつた。薄利多売と、心からの

サービスという、彼女自身に許された、至極範囲のせまい努力をかさねながら、彼女は、その業績によって生ずる発言権を、一つ一つたしかなものにしていって、娘たちをすべて将来性のある商家に嫁がせるということと、息子たちを順番に江戸に奉公に出すという大英断にあたっては、姑と夫に互して、十二分に意志を打ち出して、三井家の基礎を、もつとも低い姿勢で、確実に構築したのであった。姑・夫・嫁の意見が一本の太い主張になるということは、いつの時代でも、むづかしいことであるに違いない。そして、それを果しえた嫁というものは、いつの時代でも、一家のあり方を、誰よりもすぐれて、だまつてつくりあげてしまっているものなのである。

三井家は、江戸にあつて、越後屋を号し、伊勢屋とはいわなかった。その、越後屋も、この家の他に、いくつも、当時、あつたものなのである。この家は、中でも、釘抜越後屋と称していた。暖簾に、のマークが、染め出されていた。

釘抜は、殊法の姑奥田氏の定紋である。――

――ほくは、ここに、殊法の、おそろべきカンと、頭腦の牙えをみるのである。おそろく、姑は、この提案に驚喜して喜んだに違いないし、父は、佐々木の紋をさらさずにすみ、その四つ目の紋の一つを利用したかにみえるこの定紋に、不満の意を挟まなかったであろうと思われるのだ。――旗幟鮮明であることは、当時の社会においては、いさぎよいことであつた。

越後屋というのも、あるいは姑の一族中最大の存在であつた、越後の太守堀直寄にあやかり、またあやかろうとした策謀を秘めていなかったか、とほくは想像している。それは、実家のよさのすべてをつくした上で、そこに望めないものを駆使しうる、賢明な嫁の存在を前提としなくては、考えることの出来ない驚嘆すべき洞察であつたと思われる。

殊法は、後世にいたるまで、三井家の人々の尊敬をあつめた。この女丈夫についての物語りは、その子三井初代高利に関する説話とならんで、三井家の太いバックボーンになつていった。殊法の孫で新町三井家の祖となつた三井高治は、その「商売記」の中で、口を

きわめて、祖母をほめたたえている。

殊法は、心のやさしい人で、自分を律すること誰よりもきびしい人であつた。だから、どんなに徹底した節約をしても、一つも人にうらまれることがなかった。お客へのサービスも、採算にあわぬことはせず、来た人に冷飯をくわせ、道におちている古わらじを拾つて、壁をぬる時に入れる薬にしなさい、と知人に届けたりしても、それで立派に意志が通じていた。そこには、物の活用という点で、明るいユーモアをにじみ出させるはたらきがあふれていた。

摺鉢の底のぬけたのを樋の受筒にしたり、柄杓の底のぬけたのを茶壺の尻敷にしたり、半紙のへだてわらをとつておいて揚げ物の際使用したりしたという説話は、そのまま大茶人の茶の湯の裏かたをみるような、はればれしない説話である、と考えられる。

殊法大姉は、茶人ではなかった。そして、茶人になろうと思つてもいなかった。彼女は、一介の平凡な主婦であつたにすぎない。しかし、茶道のもつともすぐれたものを感じさせる人であつた。

◇ご法語をいただく

至誠心といふは、眞実心也。その眞実といふは、身にふるまひ、口にいいひ、心におもはん事、みなまことの心を具すべき也。即内はむなくして、外をかざる心のなきをいふなり。(勅修御伝第二十二)

お念仏を唱える時の心の持ち方には、三つの心が必要です。この三つの心を至誠心、深心、廻向発願心といいます。このご法語は至誠心とはどんな心かを説明されたものです。至誠心というと聞きなれないために、何か難しいことのように思われがちですが、要するに眞実の心、まことの心であると申されました。またこの御法語は善導大師の言葉をやさしく説明されたものです。

善導大師は至誠心を説明して「外には賢善精進の相を現し、内には虚仮をいただくことを得ざれ」といわれました。見かけだけは賢しこそうにし、努力しているように見せて、内心は虚仮の心を持つてはならぬというのです。ここに虚仮というのは、むさぼり、腹だ

ち、よこしま、偽り等の悪業のもととなる煩惱のことです。こうした煩惱がさかなくなり、そこから生れる言語や動作を虚仮の行であると説明されました。

見せかけの賢人、善人であつてはならぬ、外面を飾らずに誠の心を持つことが大切だといふのですから、何もお念仏を唱える時に限られたものでなく、人として常にあるべき姿であるといえます。しかし貪瞋邪偽という煩惱から生ずる意志や行為をなくすのだという仲々難しいわけで、凡人が望んで得られるものかどうかからぬこととなります。しかも三つの心が具わぬお念仏は功德がないと經典にあるのですから、凡人にはできないということでは、すまされぬ問題であります。

更にいうなら、至誠心をはじめとする三つの心の名前すら知らぬ者はどうなるのでしょうか。お念仏は易行であるといっても、最低限度の学問を必要とするのでしょうか。

この点について法然上人は申されました。「たとひ三心の名をだにもしらぬ無智の者なれども、弥陀の誓を勸奉て、すこしも疑ふ心なくして、この名号を唱れば、この心が即

三心具足の心にてあるなり」

阿弥陀さまの本願を信じて唱えるお念仏ならば、自然に三つの心が具わってくると申されました。要は信仰の問題であります。しかし信仰すれば何故三心が具わるのかを明かにしなければなりません。この点については次のご法語があります。

「先づ名号を唱えよ。名号の徳として妄念自ら止み、願心自ら生ずる也」

至誠心の具わらないお念仏は功德がないと申すものの、お念仏を専ら唱えるならば自然と至誠心が具ってきます。従つてとにかくお念仏を唱え続けることが第一なのであります。お念仏を唱えることが先決問題なのであります。「先づ名号を唱える」とはこのことであります。

人はもとより無智であり、その上に煩惱の巢と申してよいでしょう。人にはできない修行を阿弥陀さまがかわつて積まれましたので名号を唱えれば、その功德として人の妄念を止めて下さるのです。お念仏を唱える人の側の無智有智には関係しないことあります。

(村瀬 秀雄)

曇鸞大師と石壁玄中寺

牧 田 諦 亮

（京大人文科学研究員 文博）

一

昭和三十三年九月十八日、折悪しく、今は帝国主義日本の積極的な満洲侵略の記念日となったこの日の朝、曹洞宗の高階瓊仙老管長を団長とする日本仏教親善使節団の一行は、北京の空港を離陸、二時間足らずの間に早くも山西省の馬都太原に到着した。私は、褶曲した北支那の黄土地帯の平和な山々を六千米の高空から見下しながら、この悠久の天地に、さかしらな人間の聖戦という自衛の名をかった戦争の無意義さを、これほど痛切に思い知らされたことはなかった。しかしこれも敗戦がもたらした日本人の真理への自覚であることはあきらかであり、二千万人の中国人の戦争犠牲者、二百万人の日本人の戦争犠牲者の上にうちたてられた厳肅な記念碑であらう。とにかかくにも、人間が人間を殺すという戦争だけ

はもうごめんだとの信念を、昭和期の日本人が得たことは動かしがたい事実である。

太原の迎沢賓館に小憩の後、私達は自動車で汾河に沿うて南下し、六八軒の道を一路石壁玄中寺へと向ったのである。中国仏教協会の事実上の会長である趙樸初副会長をはじめ、同じく居士の周叔迦氏、叢林改革運動の指導者であった巨贊法師など三人の副会長が先導して、私達を玄中寺へと案内された。東西本願寺からは曇鸞・道綽二大師の頂相（肖像画）、私は浄土宗から玄中寺へ奉納するため東西本願寺の二大師図の図柄とは異った、日本の浄土宗祖法然上人の構想による半金色の善導大師図（滋賀の安田光雲画伯筆）を捧持して、中国浄土教の根本道場玄中寺へ到着したのは、午後五時頃であつたろうか。

山西省の一寒村ともいえるこの交城県の石壁山にある玄中寺は、私たちが三大師の肖像を捧持していったことから知られるように、中国の浄土教のみならず、日本の浄土教にとっても忘れることのできない名刹である。石壁山の名の通りに、周囲をそそりたった石の壁のような山にかこまれた玄中寺は、元の時代には永寧禪寺ともよばれていて、今も寺の楼門にはその名の額がかかげられている。大正九年（一九二〇年）常盤大定博士が日本人として初めてこの土地をふまれた頃は、「支那仏教遺蹟」にかかげられた写真をみてもわかるように随分と荒廃していた。そのうち、現知恩院門主岸信宏、定恵苗両師がこの寺に参拝された。曇鸞大師奉讃会をつくって、曇鸞大師の遺徳顕彰につとめてこられた東京浅草なつめ寺の菅原恵慶師が昭和十七年十月に玄中寺を訪れた頃は、まさに崩壊の一步前にあった。それが、共産党政権の中華人民共和国になってから、新建同様の大改修が行われ、いま目の前に見るような、大雄宝殿（本堂）、西方聖境（阿彌陀堂）千仏閣始め禪堂、客堂、準提堂、接引堂その他古叢林、方丈、客房、僧房などの完備した中国いな日本浄土教発祥の大伽藍たるにふさわしい規模をもった玄中寺が装いを新たに私たちを迎えてくれたのである。

この玄中寺の開祖が曇鸞大師である。白蓮社の慧遠大師寂

後六十年に山西省雁門の寒村に生れた大師は、有名な文殊菩薩の靈場である五台山の神秘的な雰囲氣に朝夕はぐくまれて、深い宗教的な信念を得、ついに五台山の寺にはいつて出家し、修道の生活にその生涯をゆだねることになった。やや長じて、当時長安浴陽を中心に北シナに栄えた羅什系の仏教の研究につとめ、ことにインドの竜樹菩薩のつくった智度論、中論、十二門論、竜樹の弟子の提婆の百論などの「四論」の学者として世に知られるにいたった。しかしこの羅什系の空思想による不生不滅の考え方は、論理的には徹底しているようであっても、現に喜怒哀楽や生老病死の日日の不安な生活の中に沈淪しているおろかな生きた人間わたしたちにとっては、現実の宗教的な解決を与えてくれるさすがとはならない。しかも大師が研学の途中で病を得たことは、この疑問をより深めることとなり、大集經の註釈の完成にも、まず不老長生の神仙の術を体得して、我が身の健康長寿を得てのちに、そのような大問題を考究することができるとした。それが、五十才を過ぎてから揚子江流域に土地を占めていた梁国に入り、道士の陶弘景（四五二—五三六）につき不老長生の術を得んとして仙經十卷を授けられる原因となったのである。人間としてこの世に生れた以上は、あくまでも長生不死の境にありたいといういかにも俗臭にみちた、しかもそれゆ

えにこそ赤裸々な真実の願望として万人がうけいれることのできる欲望から、大師の求道が再出発していることは、さきの白蓮社の、智恵のすぐれた人だけが享受し得るという観仏三昧の場合とは、おのずからその立場がことなっていることを知るべきである。

二

北シナの仏教界の主流をなしていた竜樹↓鳩摩羅什の空思想の大乗仏教の奥義に達していた曇鸞大師が、それに疑問を持ち、かえって道士に仙經を求めるにいたったことも、実は北シナに、難解な空仏教とはうらはらに、神仙方術的な仏教もさかに行われていたことを示している。この頃には翻訳仏典の体裁をとりながら、中国人が、中国の土地と人に応じたものとして撰述した疑經が数多く世に流行したことはすでに道安（三一四—三八五）の經錄にも記されていることであり、その中には道教信仰の混入したのもすくなくなかった。曇鸞大師の誕生前後に北魏孝文帝の信頼を得ていた道弁が当時魏国に流行していた大法尊王經八十余巻という大部な疑經を大衆の面前で焚焼して真偽をあきらかにしたこともよく知られている。このような有様であったから、曇鸞大師も自己の病の中で、長生不死を得たい欲望の解決を道士の仙經に求めたことも、当時としては決して不思議のことではなかつた。

陶弘景から不老長生の仙術の書十巻を得て北に帰る道すがら、外国三蔵菩提流支に会って、中国の仙經にまさる大仙方なりとして、觀經を授けられ、これによって修行すればまさに生死を解脱することができると教えられたことは、唐の律僧道宣（五九六—六六七）が統高僧伝巻六に記すところである。菩提流支は北魏時代の大訳經家として知られ、三十九部百二十七巻の新經を訳出したが、その中に世親菩薩造の無量壽經論（無量壽經優婆提舍願生偈）があり、のちに曇鸞大師がこれに註を施して、いわゆる論註二巻として、中国淨土教史に不滅の光をはなっていることはいうまでもない。菩提流支が曇鸞大師に仙教のかわりに觀經を授けたことは道宣の説であるが、曇鸞大師の教説を襲いだ道綽禪師（五六二—六四五）は道宣とは約二十年さきに世を去っているが、その代表的な著書である安樂集には、この重要なことは書き記されていない。曇鸞大師はかえって、流支訳の無量壽經論の訳語の誤りを指摘しているほどである。菩提流支が曇鸞大師に授けたという觀經も、觀無量壽經であったのか、或は他の觀經授けて、これは大仙方なりと記しているところにも、この頃の社会で、いかに神仙方術的な要素が重視されていたかが察

せられる。今日でこそ、曇鸞大師の生涯は、純粋な浄土教の最初の伝道者として美化され、ことに真宗では七高祖中でも特に大師を重視し、主著「教行信証」の骨幹である往相還相二回向の説はまったく曇鸞大師によるものであることはいうまでもない。しかし、統高僧伝に、曇鸞は神宇^{こころ}高遠で、臨機応変のはたらきがあり、もの言えばその結果を予測し、心をととのえ、気を練り、病氣にも対処して縁を識ると伝え、さらに調気論などの著があり、著作郎王邵がその注釈をつくったことさえ記しているのを見ると、曇鸞大師の布教は、あくまでも現実の社会を注視して、大師自身が自分の生命の問題についてなやんだと同じなやみを持つ人々を対象としていて、そのために自からも行じ、他をも教化し、単に弥陀一仏に帰依し浄土に往生して不退の境地を得る易行道の念仏を勧めるだけにとどまらず、道教神仙的な俗間の健康術にまで通じていて、その布教が広く行われていた現実を知ることができるのである。人間が環境をつくり、また環境が人間をつくるのと同じように、現に生きた人間の中にこそ生になやみ、死になやみ、病になやみ、苦になやむ人間にこそ、救済が必要であり、浄土が建立されねばならないとする曇鸞大師の生活が、この統高僧伝の記事のなかにいきいきと描きだされているのである。道綽禪師よりはやや後の人と思われる迦

才の浄土論は、その往生人を記事なかに、婦女姚婆のことを記して、去る貞観二十二年（六四八）七月二十日無常の時、阿弥陀仏が觀世音大勢至など無量の菩薩をしたがえて来迎されたと記すことから、その撰述が貞観二十二年を去ることそう遠くない頃と推定されるのである。この浄土論の曇鸞大師伝にも、大衆とともにある大師の生涯や、無量寿経による決定往生の勸化、大師自身の臨終来迎の有様を記している。

三

世親の無量寿経論の中心は、阿弥陀仏に、わが身わが心のすべてをまかせきって、無量寿の真精神の中に生き、無量寿の真精神の中に死後の世界をも入れて動（生）も静（死）も、限りある自己自身のむなしい存在をきりすてて、出（生）も没（死）もすべて阿弥陀仏によってのみその存在があるという「一心」、心常に作願して一心専念なれば、畢竟じて安楽国土に往生せん——この一心をさらに曇鸞大師は拡充して、時には世親の原意をのりこえて新しい解釈をほどこしている。これは現世に生きる人間を対象として、苦難よりの脱出、超克を説く宗教としては当然のことであり、そこに宗教の発展があり、機教相応の意義がある。一つのわくに同じこめられ、そのわくの外に出ることを異安心として排除することとは、かえって真実の宗教を排除することにもなりかねない

うらみが生ずるのである。かつてはそうであった、しかし今は、こう説かなくてはならないし、将来には今の説き方も変えなくてはならないであろうとの実例を、曇鸞大師は示している。難行道、易行道の解説において、五濁の惡世、無仏の時にともにこの世において不退転の道を求めようとするのに難易の二道ありとする従来の考え方に対して、曇鸞大師はこの土において不退転を求めることが陸路の歩行にたとえられる難行道であり、弥陀一仏に帰依して浄土に往生して不退転を得ることこそ水路の舟行にたとえられる易行道であるとして、阿弥陀仏の本願力が強調される。このことは、曇鸞大師在世当時の北シナの社会では、東魏の実力者宰相高歡の圧政と、西魏の大丞相宇文泰の専制とがいりみだれて各地に戦火あいつぎ、大きな社会不安を醸成していた。宇文泰が梁の元帝を破って数万の男女を捕虜として北帰したのは、北齊天保五年太子造像銘にみる比丘僧曇鸞がわが曇鸞大師とすれば、まさに大師存命中の悲惨なできごとであった。高歡が孝武帝に退位をせまった時に使となったのは僧道榮であり、この時太原を陥し入れて蒙古人の爾朱氏を破って政權をにぎった。また高歡の名を冠した高王觀世音經という疑經もこの頃に北シナに流行した。曇鸞大師の住んでいたこの石壁山玄中寺の附近一帯、山西省中央部汾河の流域地帯も高歡の占領すると

ころであった。この頃陝西省関中の地は大飢饉があいつぎ餓死者す十中に七八といわれるほどであったから連年の戦争と飢餓が北シナを掩うていたとも言える暗黒時代でもあったこのような時代、このような不安な、希望のない社会に、かつては大集經の註釈を完成せんと試みた曇鸞大師の胸中に去来したもの、頼みがたい人間の才覚を棄て去って、浄土往生を必須の条件とする不退転の獲得であり、阿弥陀仏の本願力を強調し、他力本願ことに無量寿經四十八願中の第十一住正定聚の本願、第十八浄土念仏往生の本願、第二十二必至補処の本願の三をもって浄土往生の可能性を説いた、従来の中国浄土教には見られない発想であったといい得られよう。世親の無量寿經論に説いている浄土往生実践の行儀としての礼拝・讚歎・作願・觀察・廻向の五念門は浄土往生の因として論註において曇鸞大師によって受けつがれているが、その解釈についてはそれぞれに相違のあることは講釈をまつまでもないことである。或る場合には神呪的とも受けとられるような安易な念仏によって、あるいは信心決定の相統（讚歎門）、一心に専ら阿弥陀仏を念じて浄土に往生せんと願えば、阿弥陀仏の名号を唱えることによって、一切の惡を止め、阿弥陀仏国に往生すればおのずから身口意の惡が止まり、阿弥陀如来の力によって阿弥陀仏国に往生した衆生が自利の一行にか

たよって利他の菩提心を忘れるような、二種の人となることを求める心を止める（作願門）、その他、五逆十惡のものも具足十念の力によって救済され、すべて往生の業は仏力によつてのみ可能であるという徹底した他力本願の説を曇鸞大師がうちだしたことは、大師が生きた時代背景を無視しては解決されない問題であらう。迦才の浄土論に、廬山慧遠大師らの西方往生を評して、「ついにこれ独り一身を善くするのみ、後の学ぶ者承習するところなし」といつているのは、あれほどの大思想家であつた慧遠大師も結局廬山の小天地に起居して一塊の有閑の智識階級の中に独善の往生を提唱したのに反して、六十年後の曇鸞大師がひろく大衆と密着して彼土往生の他力本願の信仰を鼓吹した実情を示すものである。そして、共産党政権指導下の中国にあって、数千万金を投じて、政治的意図の有無はこのさい問題ではなく、ともかく石壁山玄中寺が復興したことは、曇鸞大師の、中国浄土教史、ひいては日本浄土教史に及ぼした影響の大きさをあらためて認識せしめるものであることを銘記しておきたい。

編集後記

▽本誌は昨年の十一月号で「現代仏教批判」特集を試みました。この特集を企画した意図は各方面から与えられた批判を通して、世間が仏教に何を求めているかということとを端的に知る為でした。批判を知ることとは布教の上にも必要なことと思ひます。

▽今月号は「現代に生きてゐる仏教」の特集として、仏教が現代の社会に貢献しているありかたをレポートしました。批判と同時によい面を忘れてはなりません。

▽表紙の写真と解説を二月号から永らく御執筆頂戴した石上善応氏に替って佐藤良純氏にお願いしました。今後しばらくの間、氏が印度留学中に御自分で写した新しい写真で飾って頂きます。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円
(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円
(送料 不要)

浄土 三月号

昭和十年五月廿日
第三種郵便物認可

昭和三十九年 二月廿五日 印刷
昭和三十九年 三月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男
印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿二
発行所 法然上人饗仰会

電話東京二六二局五九四四番
振替東京八二一八七番

大正大学

学長 佐藤 密雄 東京都豊島区西巢鴨四丁目

- 特色
1. 西と東、右と左の中道を行く仏教精神が本学建学の基礎である。従って、穏健中正、操守高き学生を育成する事を目標とし、教授凡てが身を以て指導している。
 2. 学生は、入学と同時に専攻別による13の研究室に所属して夫々の教授から指導を受けるほか、研究室の豊富な蔵書を利用して勉強できる。

専攻

文学部＝国文学、英文学、史学、西洋哲学、宗教学
中国学、社会学、社会事業の8専攻

仏教学部＝仏教学、梵文学、天台学、真言学、浄土学の5専攻

大学院＝修士コース、博士コース（仏教学、宗教学、国文学）

昭和39年度1年の募集人員は200名、男女共学試験科目は、国語（漢文をふくむ）社会、外国語（英、独、仏のうち一つ）

試験期日 第2次 3月27日・28日（金・土）

詳細は入学案内を参照のこと



詩物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 040 8847番 本社工場 高岡市横田

日本一の生産・設備

梵鐘 (45cm～85cm) 在庫豊富

喚鐘 (12cm～51cm)

音響 理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞